

永沢碧衣展

まれびとレジデンス
vol.3

彼方の眼に映るもの

Nagasawa Aoi Exhibition

●会場 五城目町各所
●入場料 無料

まれびとレジデンス vol.3

永沢碧衣展 彼方の眼に映るもの Nagasawa Aoi Exhibition

展覧会アーカイブ



はじめに

本展は、美術家・永沢碧衣による約3年ぶりの個展として、2024年9月20日から11月4日まで秋田県五城目町内の11会場にて開催された。展覧会タイトルは《永沢碧衣展 彼方の眼に映るもの》。本図録はその展示の全容と、会期中に展開された活動を記録するものである。永沢碧衣（1994-）は、色彩、光と影、生と死、そして記憶や気配といったテーマに関心を寄せながら、自然と人との関係性にまなざしを向けてきた。2010年代後半から各地を旅し、その土地に根ざした植生や動植物、人びとの暮らしに触れるフィールドワークを重ねてきた作家は、そうした出会いをもとに、多様なメディアで表現を続けている。絵画をはじめ、イラストレーション、映像、インスタレーションなど、その表現は多岐にわたる。

本展は、2014年に開催された初個展「Sky, blue」からちょうど10年という節目にあたる。近年の代表作に加え、各地での滞在制作によって生まれた作品、学生時代の初期作品も織り交ぜ、10年間の軌跡を振り返る構成とした。うるま（沖縄）・遠野（岩手）・白神（青森）・秋山郷（新潟）など、多様な土地をめぐる制作を重ねてきた永沢にとって、五城目は大学時代に初めてフィールドワークで訪れ、現地調査に根ざした思索と表現を育んだ場所でもある。

自然災害、獣害といった課題が各地で顕在化するなか、野生と隣り合う日常を送るこの地域では、人と自然の関係を問い直す契機が至るところに存在している。森林が町の8割以上を占める五城目で、人と動植物、人と自然のあわいに眼差しを向ける永沢の作品は、私たちが生きる世界の縁（ふち）にふと立ち止まるような時間を与えてくれるだろう。

目次

展示会場	
ものかたり	9
福祿寿酒造	13
下タ町醸し室 HIKOBE	17
すずなり	18
山王山 高性寺	19
佐藤木材容器	23
環境と文化のむら（自然ふれあいセンター）	25
BABAME BASE	27
PocoPoco Kitchen	29
シェアビレッジ町村	31
貸し棚おうみや	32
会場スナップ	33
展覧会関連企画	37
展示作品リスト	41
デザイン	43
作家年表	45
メディア掲載リスト	47

永沢碧衣展

彼方の眼に映るもの
Nagasawa Aoi Exhibition

五城目町会場マップ

駐車場について：駐車場については、各会場にお問い合わせください。

↑琴丘森岳IC
←八郎湯方面
五城目八郎湯IC
湖東厚生病院
五城目警察署
五城目町役場
馬場目川
イオン五城目店
ものかたりから自動車：約10分
ものかたりから自動車：約5分
秋田自動車道
昭和美鷹IC
↓秋田市方面

A アートギャラリーものかたり
開館日：火～日・10:00-18:00
秋田県南秋田郡五城目町上町39
◎アクセス
自動車 秋田自動車道「五城目八郎湯IC」から
県道15号線経由にて約10分
バス 秋田駅西口から五城目線にて約75分
「五城目バスターミナル」下車徒歩約10分
電車 JR奥羽本線「八郎湯駅」より
タクシーにて約15分

B 福祿寿酒造
開館日：月～金(祝日は休み)・10:00-16:00
同五城目町下町48

C 下町醸し室 HIKOBE
開館日：月火木金・10:00-17:00
土日祝/朝市開催日(下一桁が2・5・7・0)・9:00-13:00
同五城目町下町236-2

D すずなり
開館日：金～日・10:00-17:00
同五城目町上町52

E 山王山 高性寺
開館日：火～日・8:00-17:00
同五城目町下町179

F 旧武石自転車
開館日：滞在制作期間のみ開館(10月1日～10月10日)
同五城目町下町71-2

G 佐藤木材容器
開館日：金～日、祝日・10:00-15:00
同五城目町大川谷地中宇環添35

H 環境と文化のむら(自然ふれあいセンター)
開館日：火～日・9:00-17:00
同五城目町上樋口山田沢156

☆賞し棚 おうみや 開館日：水金日・10:00-16:00

K シェアビレッジ町村
開館日：9/28(土)・10/5(土) 11:00-15:00
※上記外の日程でも宿泊の方のみ観覧可能
同五城目町馬場目町村49

ものかたりから
自動車：約10分

馬場目川

永沢碧衣、10年を振り返る。

作家や作品の題材とゆかりのある五城目町の人や場所を
巡りながら鑑賞できる展覧会です。



〈共鳴〉2023年

朝市通り周辺マップ

ジョイカル五城目店
一場自動車整備工場
上小阿仁村方面
ローソン
千葉内科医院
ものかたりから
徒歩：約10分
ハチや菓子舗
郵便局
五城目朝市ふれあい館
朝市通り
馬場目川
馬場目方面

A ものかたり
B いちカフェ
C バスターミナル
D 郵便局
E 郵便局
F 旧武石自転車

☆賞し棚 おうみや 開館日：水金日・10:00-16:00

K シェアビレッジ町村
開館日：9/28(土)・10/5(土) 11:00-15:00
※上記外の日程でも宿泊の方のみ観覧可能
同五城目町馬場目町村49

ものかたりから
自動車：約10分

会期：2024年9月20日(金)～11月4日(月)

滞在制作期間：10月1日(火)～10月10日(木) 場所：旧武石自転車

◎会場 五城目町各所 ●入場料 無料

[展覧会総合案内所]

A アートギャラリーものかたり

開館日：火～日・10:00-18:00

秋田県南秋田郡五城目町上町39

◎アクセス

自動車 秋田自動車道「五城目八郎湯IC」から
県道15号線経由にて約10分

バス 秋田駅西口から五城目線にて約75分
「五城目バスターミナル」下車徒歩約10分

電車 JR奥羽本線「八郎湯駅」より
タクシーにて約15分



〈和海岸の休日〉2012年

B 福祿寿酒造

開館日：月～金(祝日は休み)・10:00-16:00

同五城目町下町48



〈帰源回帰〉2017年

C 下町醸し室 HIKOBE

開館日：月火木金・10:00-17:00

土日祝/朝市開催日(下一桁が2・5・7・0)・9:00-13:00

同五城目町下町236-2

D すずなり

開館日：金～日・10:00-17:00

同五城目町上町52



〈白昼夢〉2022年

E 山王山 高性寺

開館日：火～日・8:00-17:00

同五城目町下町179

F 旧武石自転車

開館日：滞在制作期間のみ開館(10月1日～10月10日)

同五城目町下町71-2

[最新情報をチェック!]

関連イベント、会場情報等は
SNS等で随時告知します。



ものかたり
[instagram]



永沢碧衣
[instagram]



永沢碧衣
AOI NAGASAWA
ART WORKS

本展に関するお問合わせ：アートギャラリーものかたり

info@mono-katari.jp

[主催] 合同会社みちひろ

[後援] 五城目町、五城目町教育委員会、秋田魁新報社、毎日新聞秋田支局、
AAB秋田朝日放送、公立大学法人秋田公立美術大学

[助成] 芸術文化振興基金



芸術文化振興基金

A | ギャラリーものかたり

「ものかたり」は、五城目町全域に展開した本展のエントランス会場として位置づけられた。

会場では、2013年に開催された作家の初個展「sky, blue」で中心的に展示された《和海駅の休日》(2011)を、10年ぶりに再公開。あわせて近年制作された実験的な映像作品や、他分野のクリエイターと協働した取り組みも紹介された。具体的には、秋田の郷土食材・ハタハタを題材にした絵本《ハタハタ、け》(2021)、溪流魚イワナをめぐるドキュメンタリー映画『ミルクの中のイワナ』のサウンドトラックCDに採用された原画《A TROUT IN THE MILK》(2023)などが展示された。

水、魚、青——こうした自然や生命にまつわるキーワードは、初期から近作に至るまで一貫して作家の関心を貫いている。会場では、10年の時間をまたぎながら、作風の変遷や視点の深化を見比べることができる構成となっており、作家の内面や技術的变化がどのように作品に結実しているのかを、観る者が自由に想像できる構成となった。

上・右から順に
《和海駅の休日》2012年、アクリルガッシュ、ワトソン紙（板貼）
《湖中》2014年、岩絵具、水干絵具、胡粉、麻紙
《ハタハタ、け》2021年、アクリルガッシュ、カンヴァス（板貼）
下・左
《A TROUT IN THE MILK》2023年、アクリルガッシュ、岩絵具、水干絵具、胡粉、カンヴァス（板貼）





「町と対照的に描かれた黒い魚たちに、思わず思いを馳せてしまいます。」

「色が何層にも何層にも重なって、深みを感じました。」



上・左から順に
 《ハタハタ、け》2021年、アクリルガッシュ、カンヴァス（板貼）
 ドキュメンタリー映画『ミルクの中のイワナ』予告編
 下・左から順に
 《湖中》2014年、岩絵具、水干絵具、胡粉、麻紙
 《緑源》2014年、ポスターカラー、ワトソン紙（板貼）



B | 福祿寿酒造

「福祿寿酒造」は、銘酒「福祿寿」や「一白水成」で知られる、16代続く日本酒の醸造元である。

土地の伏流水を仕込み水に用い、専属農家と連携して酒米を育てるなど、地域と深く結びついた酒づくりを行ってきた。朝市通りの入口に面した酒蔵の一角には、家族の記憶や生命の循環をテーマにした2点の絵画が展示された。

ひとつは、作家の祖父がかつてこの酒蔵で働いていた記憶をもとに制作された《祖父母の記憶 M》(2015)。約50年前の白黒写真や、当時の記憶に残る色彩を手がかりに、身近な家族の追憶が丁寧に描かれている。もう一点は、大学の卒業制作として発表された《淵源回帰》(2017)。川で生まれ、大海を回遊し、ふたたび川へと戻るサケ・マスが群れが、幅6メートルを超える画面いっぱいに描かれ、生命の循環を力強く表現している。

長い時間の中で受け継がれる生命の連なりは、歴史ある酒蔵という空間と共鳴する。

「新たな生命の誕生を迎えるために、生まれたはずの孵化場の柵を越え、仲間の屍を越え、骨皮になっても母川の根源を目指して進み続ける、生命の力強さや循環」(永沢)は、作品を通じていっそう鮮やかに伝わってきた。





「魚一匹一匹の表情の違いや、鱗や皮の様子から伝わる生の厳しさ、力強さが伝わる作品でした！」

「翔上してくるサケのけわしい顔つきが手前になるとおだやかに見える。命がけて世代をつないだ子の姿なのか、産卵後の解放された親の姿なのか…見れば見るほど想像がふくらみます。」

C | 下夕町醸し室 HIKOBE

「下夕町醸し室 HIKOBE」は、福祿寿酒造が運営する地域の交流拠点である。

日本酒の販売や試飲にとどまらず、地元の食材や食文化をテーマにした企画を積極的に開催し、地域と食をつなぐハブとしての役割も果たしている。

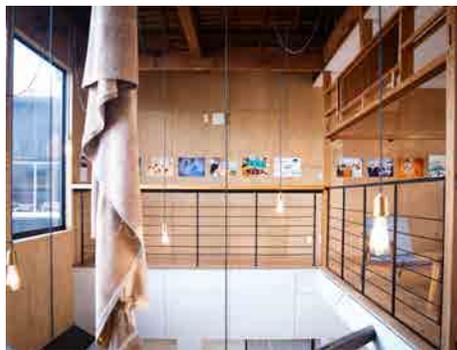
2021年に開催された食イベントでは、永沢は〈パシヤパ舎〉として参加。

〈パシヤパ舎〉は、作家と、五城目町内で「ポコポコキッチン」を主宰する料理人・石丸敬将による、食とアートのクリエイティブユニットである。

このイベントでは、スペイン発祥の一口料理「ピンチョス」を主役としたメニューが石丸により展開され、永沢は料理を彩るピックやメニュー札などのデザインツール、そしてイベントのメインビジュアルを手がけた。

本展では、当日のビジュアルデザインに用いられた原画に加え、イベント当日の様子を記録した写真資料がラウンジスペースに展示された。

「ピンチョス祭りの旗の絵、永沢さん作画だったんだと感動！」



《ピンチョス祭り》2019年、ミクストメディア

D | すずなり

「すずなり」は、元履物店をセルフリノベーションして誕生した革工房兼ショップである。

さまざまな動物の皮革の特性を見極めながら製品を手がける小松田夫妻が営み、アトリエならではの手仕事の空気と、作り手の美意識が反映された空間が訪れる人を迎える。

近年は「ランドセルとともに過ごした日々を形に残したい」という思いから、ランドセルのリメイクにも取り組んでいる。

身体的な記憶や経験を作品として昇華する永沢にとって、「すずなり」のものづくりには自身の制作と通じ合う感覚があるという。

本展では、そうした共鳴関係を象徴するような作品《解ける者》(2021)が店内の壁面に展示された。本作は、作家が地元狩猟会に所属し、初めて熊の解体を体験した記憶をもとに制作されたものである。熊の身体が山肌と溶け合い、大地へと還っていく様子、そして息絶える直前の吐息までが、淡くじむ絵肌の中に描き込まれている。

作家は、人が衣服を身にまとうように、熊がその身を守る毛皮もまた環境や時代に適応してきたという痕跡に着目し、そこから本作の着想を得たという。

「瞳の先が気になりました。何を思っているのだろう」



左：《解ける者》2021年、岩絵具、水干絵具、胡粉、アクリルガッシュ、麻紙（板貼）
右：《白昼夢》2022年、岩絵具、水干絵具、胡粉、アクリルガッシュ、麻紙（板貼）

E | 山王山 高性寺

朝市通りの突き当たりに位置する「山王山 高性寺」は、500年以上にわたり朝市を見守ってきた市神が祀られる歴史ある寺院である。その本堂内に、本展では《全てを生み出す穴》(2023)が展示された。

この作品は、同年に開催された特別展「からだじゅうであじわう 大根ビネーション展」(秋田県立近代美術館)において滞在制作されたものである。特別展で展示された高性寺に奉納された大根絵馬など、“大根”にまつわる秋田県内の美術作品や民俗資料から着想を得ながら、作家は来場者との対話や参加を通して本作を完成させた。

畳の上に直接敷かれた本作には、漆黒の色面で“全てを飲み込み、また生み出す”ような〈穴〉が描かれている。その上を観覧者は自由に歩くことができ、空間全体が身体的な感覚と向き合う場となった。現代美術と地域の精神文化が響き合う本堂という場において、本作は祈り、感覚、記憶、そして創造の新たな接点を浮かび上がらせた。

会期中、作品のそばには住職が自作した感想ノートが設置され、多くの鑑賞者がその場で感じた思いや気づきを記していた。

《全てを生み出す穴》2023年、アクリルガッシュ、カンヴァス



「お寺の雰囲気と相まって不思議な空間でした。」

「植物の根が線・青の深い色とりどりではりめぐらされているのが毛細血管のようであり、赤ちゃんを育む胎盤そっくり。それが大いなる母、道、空、宇宙…なのかな。」

「全てを生み出す穴に吸い込まれそうになりました」

《清浄の花》2019年、アクリルガッシュ、板



G | 佐藤木材容器

昭和40年創業の「佐藤木材容器」は、秋田杉や欅などの国産材を用いたお盆・トレイ・プレートなど、暮らしに寄り添う木製食器を製作する工房である。近年は自社ブランドも展開し、素材の魅力と使い手に配慮した造形が注目を集めている。

作家は、立ち上げに関わった都内飲食店で同工房製の食器と出会い、木目を辿るように記憶を呼び起こすその感性に共鳴。以後、自身の主題にふさわしい額縁の制作を工房を主宰する佐藤氏に依頼するようになった。

本展では、佐藤木材容器製の額縁を用いた作品《跨ぐ者》(2024)、《地脈を辿る者》(2022)、《冬来春不遠》(2023)が、工房に隣接するショールーム内に展示された。

また、同じ空間には、秋田鳥海地域にゆかりのあるイヌワシを描いた《還る者》が展示され、作家による以下のエッセイが添えられた。

《還る者》

秋田市大森山動物園で長年飼育され、
国内最高齢の47歳でこの世を去ったイヌワシ・鳥海。
鳥海山の麓で保護されてから約半世紀、
秋田市の土地と空気の中で暮らしてきた。
彼の骨は、身体は、園内で亡くなった。
ではその精神はどこへ飛び去ったのか。
イヌワシ・鳥海が誕生した鳥海山。
そこには彼すら知らない、
山の実りや光や闇が変動を繰り返し、
止むことを知らない大地が大きく呼吸し続けている。
巨木が倒れたあとの切り株のまわりには新たな植生が成り立ち、
止めとない生命に彩られていく。
代々受け継がれてきた身体や精神に刻まれた種子は終わりを知らず、
原生の地へ降り立ち、
新たな生命の息吹となって環を重ねているのではないだろうか。
彼の魂の行方を想像する。

(作家によるテキスト／原文ママ)



《還る者》2020年、岩絵具、水干絵具、胡粉、アクリルガッシュ、麻紙（板貼）
下・左から順に
《冬来春不遠》2023年、アクリルガッシュ、岩絵具、水干絵具、胡粉、カンヴァス（板貼）
《跨ぐ者》2024年、アクリルガッシュ、岩絵具、水干絵具、胡粉、熊膠、板
《地脈を辿る者》2022年、アクリルガッシュ、岩絵具、水干絵具、胡粉、カンヴァス（板貼）

H | 環境と文化のむら（自然ふれあいセンター）

秋田県の鳥獣保護センター内に設置された自然体験施設「環境と文化のむら」では、来訪者がバードウォッチングや森林散策などを通じて、自然との触れ合いを楽しむことができる。

作家は大学在学中、この施設のキャンプサイトで開催された写真家・田附勝による課外講座「夜の広場で全ての灯りを消してみる。」に参加している。視覚以外の感覚に意識を向けるこの体験の中で、夜空や街の灯りが際立つ一方、深まっていく森林の闇を身体全体で知覚したという。そこで得られた、「人間は光に安堵し、野生動物は暗闇に安全地帯を求める」という気づきは、のちの制作における自然との向き合い方に影響を与えた。

会場では、初めて熊をモチーフに描いた《背負う者》(2018)と、冬眠中の熊の見る夢を想像した近作《宿る者》(2022)が背中合わせに展示された。自然の中に身を置くことで立ち現れる気配や、見えないものへの想像力をめぐる2作品が、森の気配が近い施設内で静かに向き合っていた。

《背負う者》

「霧か雲か雨なのか。
すべてがおぼろげになるような
深い深い気配の層が吐き出されている。
どっしりとした重みをのせた静寂の中で
ときに露になる世界の輪郭は美しく、怖い。

それでも深緑を纏い、潜みながら暮らす者たちと
私たちの世界はこの瞬間も繋がっていて、
常に変化し、
何かが変わらずに在り続けている。

静と動、闇と光が交差する領域を横断していた
あの黒い影の視線の先には
いったい何が映し出されていただろうか。

彼がこれから歩いていく場所は、
還る場所は、
背負っていく場所は
どこへ・・・

すべてが深い霧に包まれていく。」

(作家によるテキスト／原文ママ)



「テーマが胸にせまってきます。自然や野生動物との共生、難しい状況
が近年ありますが、必要なのでしょうね。」

上：《宿る者》2022年、アクリルガッシュ、岩絵具、水干絵具、胡粉、膠、麻紙（板貼）
左下：《背負う者》2018年、アクリルガッシュ、岩絵具、水干絵具、胡粉、板

I | BABAME BASE

「五城目町地域活性化支援センター（BABAME BASE）」は、旧馬場目小学校の校舎を活用し、2013年に誕生したレンタルオフィスである。各教室に入居する企業や個人事業主が、校舎やグラウンド、町中のフィールドを活かし、ユニークな事業活動を展開している。作家自身も入居事業者の一員であることから、本展では館内の共有空間に作品を展示することとなった。

玄関ホールの高い吹き抜けに展示された《流転》（2023）は、秋田県の中山間地域で滞在制作された作品である。何度でも姿形を変えて湧き上がる生命を象徴するイワナが、全長10mの大画面に描かれている。

2階の多目的空間には《共鳴》（2023）が展示された。本作は、濁流を挟んだ対岸から熊の群れがこちらを凝視する様子を描いた作品である。同年、秋田県各地では記録的な大雨や熊の出没が相次ぎ、そうした緊迫した状況下で本作は制作された。

また「BABAME BASE」は、豪雨災害時に五城目町内の支援拠点の一つとして開放された経緯があり、《共鳴》は氾濫後の復旧作業が今なお続く河川の風景を背景に展示された。



左：《共鳴》2023年、アクリルガッシュ、岩絵具、水干絵具、胡粉、熊膠、カンヴァス（板貼）

右：《流転》2023年、アクリルガッシュ、岩絵具、胡粉、熊膠、カンヴァス

J | PocoPoco Kitchen

「ポコポコキッチン」は、BABAME BASE の旧ランチルームを活用した、食を通じた交流スペースである。作家が参画する「パシャパ舎」によって運営され、紹介制の“まかない処”としてカフェやランチを提供しながら、メンバーシップ制での畑作にも取り組んでいる。「何を食べるか」よりも「誰と、どう食べるか」を大切にするこの場には、日々の営みの中に芽生える対話や関係性が自然と育まれている。

2019年には、パシャパ舎として「うるまシマダカラ芸術祭」(沖縄県うるま市)に参加。島の人々との交流や暮らしの記憶をもとに、絵巻物として視覚化した作品を制作し、料理というかたちでもその土地の感覚を表現していった。

本展では、こうした活動のアーカイブとして、《シマダカラ風土絵巻》と記録写真集がポコポコキッチンの一角に展示された。日常と制作、記録と記憶が緩やかに混ざり合うこの空間での展示は、作家の実践が生まれる現場の空気を、そのまま鑑賞者へと手渡すような場となった。



左：《一線》2019年、アクリルガッシュ、岩絵具、胡粉、板
右：《断片化されるもの》2020年、アクリルガッシュ、岩絵具、水干絵具、胡粉、板
《シマダカラ風土絵巻》2019年、アクリルガッシュ



「写実と幻想的な雰囲気との共存が美しい！」

「永沢さんの作品をきっかけに、素敵な場所や景色、地元の方に出会えました！」

K | シェアビレッジ町村

築 140 年を超える茅葺古民家を再生した「シェアビレッジ町村（まちむら）」は、「村があるから村民がいるのではなく、村民がいるから村ができる」という理念のもと、全国の“村民”（会員）たちが集い、交流し、滞在できる場として運営されてきた。コロナ禍以降は一棟貸しの宿泊施設として、かつての暮らしの痕跡と、今を生きる人々の営みが交差する拠点となっている。

作家が初めてこの場所を訪れたのは 2016 年。山野草の庭や、里山の風景と調和する茅葺屋根のたたずまい、そして土地の内外から集まる人々のユニークなつながりに、五城目の土地ならではの魅力を感じたという。

展示では、広々とした土間の奥に広がる板間の空間を活かし、3 点の絵画が設えられた。シェアビレッジ町村の外観を描いた《Share village》(2020) は、茅葺屋根のフォルムと、そこに根づく時間の層を丁寧に捉えた一作である。山菜が芽吹く季節、フキの茂みに潜むカエルの姿を描いた《五月雨を乞う》(2021) は、静かな視線のなかに生命の気配を宿す。そして最新作《継承者》(2024) では、狩猟犬の親子が描かれ、受け継がれていく記憶と絆が静かに浮かび上がる。

作品は会期中、宿泊者のみならず、日帰りで訪れた鑑賞者にも公開された。



左：《継承者》2024 年、アクリルガッシュ、岩絵具、水干絵具、胡粉、カンヴァス（板貼）

右上：《Share Village》2020 年、アクリルガッシュ、ワトソン紙

右下：《五月雨を乞う》2021 年、岩絵具、水干絵具、胡粉、麻紙（板貼）

| 貸し棚 おうみや

2023 年にオープンした「貸し棚 おうみや」は、元自転車店の店舗跡を活用し、「好きや得意で人がつながる場所」をコンセプトに再生された交流スペースである。医師と集落支援員として地域に根ざす漆畑夫妻によって、「心と体の健康は、暮らしのなかでこそ育まれる」という思いのもと、誰もがふらりと立ち寄れる開かれた場づくりが実践されている。

本展で展示された《邂逅の夜》(2020) は、夫妻が初めて手にした作家の作品であり、作家にとっても極めて私的な体験をもとに描かれた一作である。病を患いながらも周囲に気遣いを見せ続けた祖母、そして家族がその介護に追われるなかで事故に遭い命を落とした愛猫。二つの喪失を経験した作家は、彼らが見たかったかもしれない世界を想像し、作品に結晶させた。《邂逅の夜》が「おうみや」という日々の暮らしと結びついた場所に迎え入れられたことで、来場者はそれぞれの記憶を重ねながら、日常のなかにある祈りのかたちについて想いを巡らせることができた。



《邂逅の夜》2020 年、アクリルガッシュ、岩絵具、水干絵具、胡粉、麻紙（板貼）

会場スナップ





展覧会関連企画 「ハタハタを描こう！」

2024年

10月1日（火）－11月4日（月）

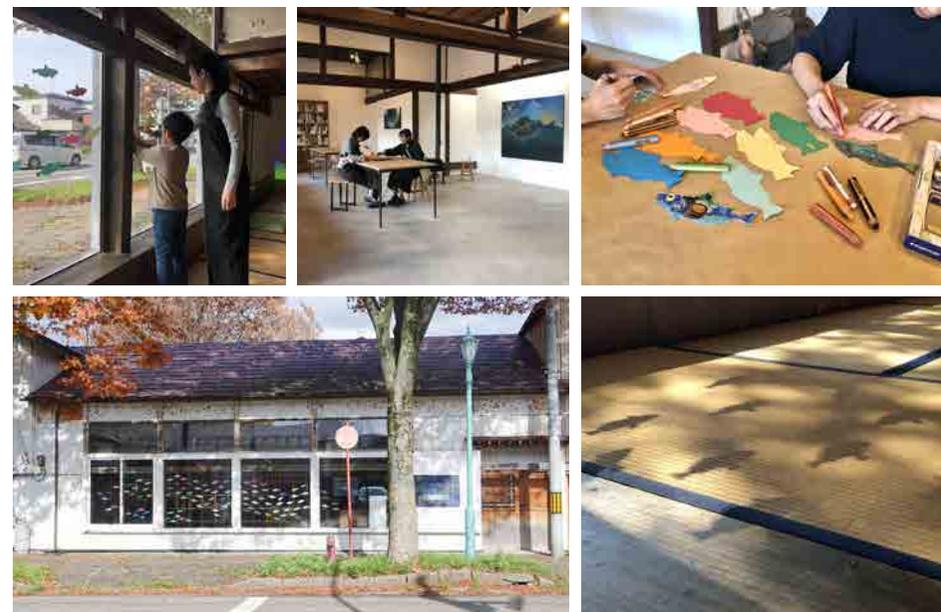
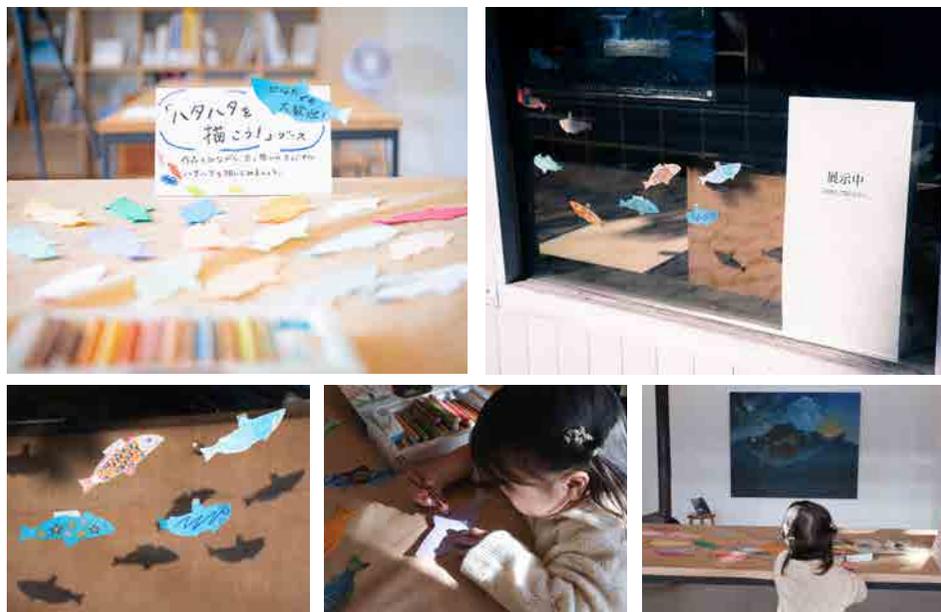
会期中 随時開催

会場 | ギャラリーものかたり
参加者数 | 約50名

会期中、ギャラリーものかたりでは「ハタハタを描こう！」と題した参加型のコーナーを設けた。作家が制作に携わった絵本『ハタハタ、け』とその原画の展示に隣接して、ハタハタの形に切り抜かれた色画用紙とクレヨンを用意したアトリエブースを設置。完成したハタハタたちは会場のショーウィンドウに一つずつ飾られ、日を追うごとにその光景はにぎやかさを増していった。

作品づくりに参加したのは、親子連れや年配のご夫婦、学生、海外から訪れたアーティストなど、年齢や背景もさまざまな約50名。訪れた人の手から生まれた色とりどりのハタハタが空間を彩り、展覧会にもうひとつの物語が加わるような時間となった。

ギャラリーや美術館ではつい身構えてしまうという人も、本物の作品を前に思うままに描くひとときを楽しんだことで、創作をより身近に感じるきっかけとなったのではないだろうか。



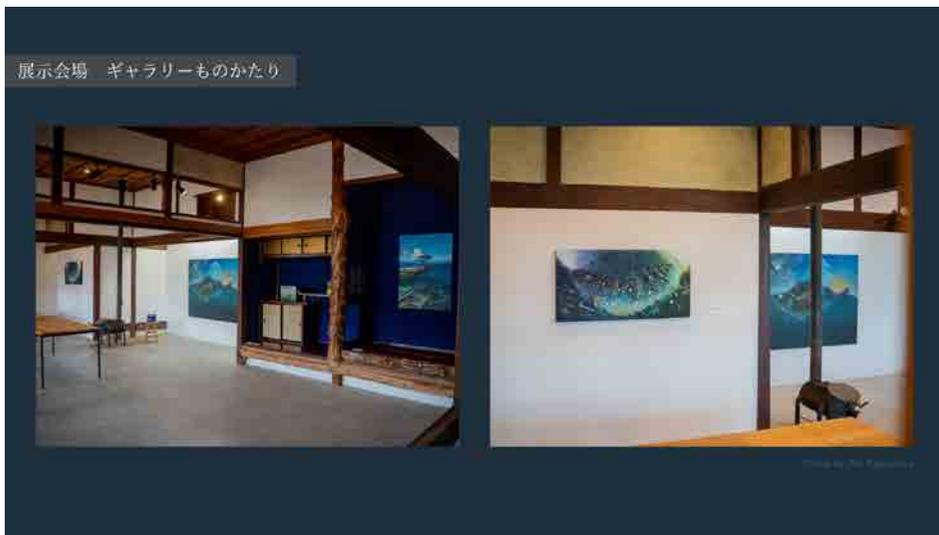
展覧会アフタートーク

2024年
12月5日(木) オンライン収録

vol.1 山本太郎 × 永沢碧衣

登壇者 | 山本太郎(美術家)、永沢碧衣(本展作家)
聞き手 | 小熊隆博(ギャラリーものかたり主宰)

作家と縁のあるゲストと会期終了後にオンライン収録したアフター・トークの第一弾。秋田公立美術大学の教員(当時)として学生時代の永沢を知る現代芸術家・山本太郎氏とともに、同じ作家としての視点から展覧会を振り返りながら、永沢が大学在学中の2014年に開催した初個展のエピソード、永沢作品の変遷と変わらない魅力、今後への期待などが語られた。



動画リンク
https://youtu.be/6mix2X9EI4E?si=h_ed_qEoOmXyeTn0

2024年
12月6日(金) オンライン収録

vol.2 石倉敏明 × 富川岳 × 永沢碧衣

登壇者 | 石倉敏明(文化人類学者)、富川岳(シシ踊り舞手・プロデューサー)
永沢碧衣(本展作家)
聞き手 | 小熊隆博(ギャラリーものかたり主宰)

アフター・トークの第二弾は永沢と文化人類学者・秋田公立美術大学 准教授の石倉敏明氏、シシ踊り舞手・プロデューサーの富川岳氏による鼎談として収録された。富川氏の拠点である岩手県・遠野地方をめぐる三者の接点から、永沢が遠野で参加したアートプロジェクトについて、また永沢が作品制作に向けて行うフィールドワークの特徴や作品への関心層の幅広さ、今後の活動展開に向けた期待など、地域や分野を越えた広い視点から意見が交わされた。



動画リンク
<https://youtu.be/p1m6achndY0?si=ngKLIDT0mSsgQvnV>



出品作品リスト

A ものまたり

- ① 《和海峡の休日》 2012年 作家蔵
アクリルガッシュ ワトソン紙
1,030×1,456 mm
- ② 《緑源》 2014年 個人蔵
ポスターカラー ワトソン紙
257×182 mm
- ③ 《湖中》 2014年 作家蔵
岩絵具 水干絵具 胡粉 麻紙
F4 242×333 mm
- ④ 《ハタハタ、け》 2021年 作家蔵
アクリルガッシュ カンヴァス
1,620×1,303 mm
- ⑤ 《A TROUT IN THE MILK》 2023年 作家蔵
アクリルガッシュ 岩絵具 水干絵具 胡粉 カンヴァス
900×450 mm

B 福祿寿酒造

- ⑥ 《祖父母の記憶 M》 2015年 作家蔵
アクリルガッシュ ワトソン紙
560×560 mm
- ⑦ 《淵源回帰》 2017年 作家蔵
アクリルガッシュ 岩絵具 水干絵具 胡粉 板
6,600×1,600 mm

C 下町醸し室 HIKOBE

- ⑧ 《ピンチョス祭り》 2019年 個人蔵
ミクストメディア

D すずなり

- ⑨ 《解ける者》 2021年 作家蔵
岩絵具 水干絵具 胡粉 アクリルガッシュ 麻紙
F100号 1,620×1,303 mm
- ⑩ 《白昼夢》 2022年 個人蔵
岩絵具 水干絵具 胡粉 アクリルガッシュ 麻紙
550×300 mm

E 山王山 高性寺

- ⑪ 《清浄の花》 2019年 個人蔵
アクリルガッシュ 板
450×300 mm
- ⑫ 《全てを生み出す穴》 2023年 作家蔵
アクリルガッシュ カンヴァス
4,000×7,000 mm

G 佐藤木村容器

- ⑬ 《還る者》 2020年 個人蔵
岩絵具 水干絵具 胡粉 アクリルガッシュ 麻紙
M50号 1,167×727 mm
- ⑭ 《地脈を辿る者》 2022年 個人蔵
アクリルガッシュ 岩絵具 水干絵具 胡粉 カンヴァス
149×174 mm
- ⑮ 《冬来春不遠》 2023年 個人蔵
アクリルガッシュ 岩絵具 水干絵具 胡粉 カンヴァス
M40号 1,000×652 mm
- ⑯ 《跨ぐ者》 2024年 個人蔵
アクリルガッシュ 岩絵具 水干絵具 胡粉 熊膠 板
174×149 mm

H 環境と文化のむら (自然ふれあいセンター)

- ⑰ 《背負う者》 2018年 作家蔵
アクリルガッシュ 岩絵具 水干絵具 胡粉 板
P100号 1,620×1,120 mm
- ⑱ 《宿る者》 2022年 作家蔵
アクリルガッシュ 岩絵具 水干絵具 胡粉 膠 麻紙
F100号 1,620×1,303 mm

I BABAME BASE

- ⑲ 《流転》 2023年 作家蔵
アクリルガッシュ 岩絵具 胡粉 熊膠 カンヴァス
4,000×10,000 mm
- ⑳ 《共鳴》 2023年 作家蔵
アクリルガッシュ 岩絵具 水干絵具 胡粉 熊膠 カンヴァス
4,860×970 mm

J PocoPoco Kitchen

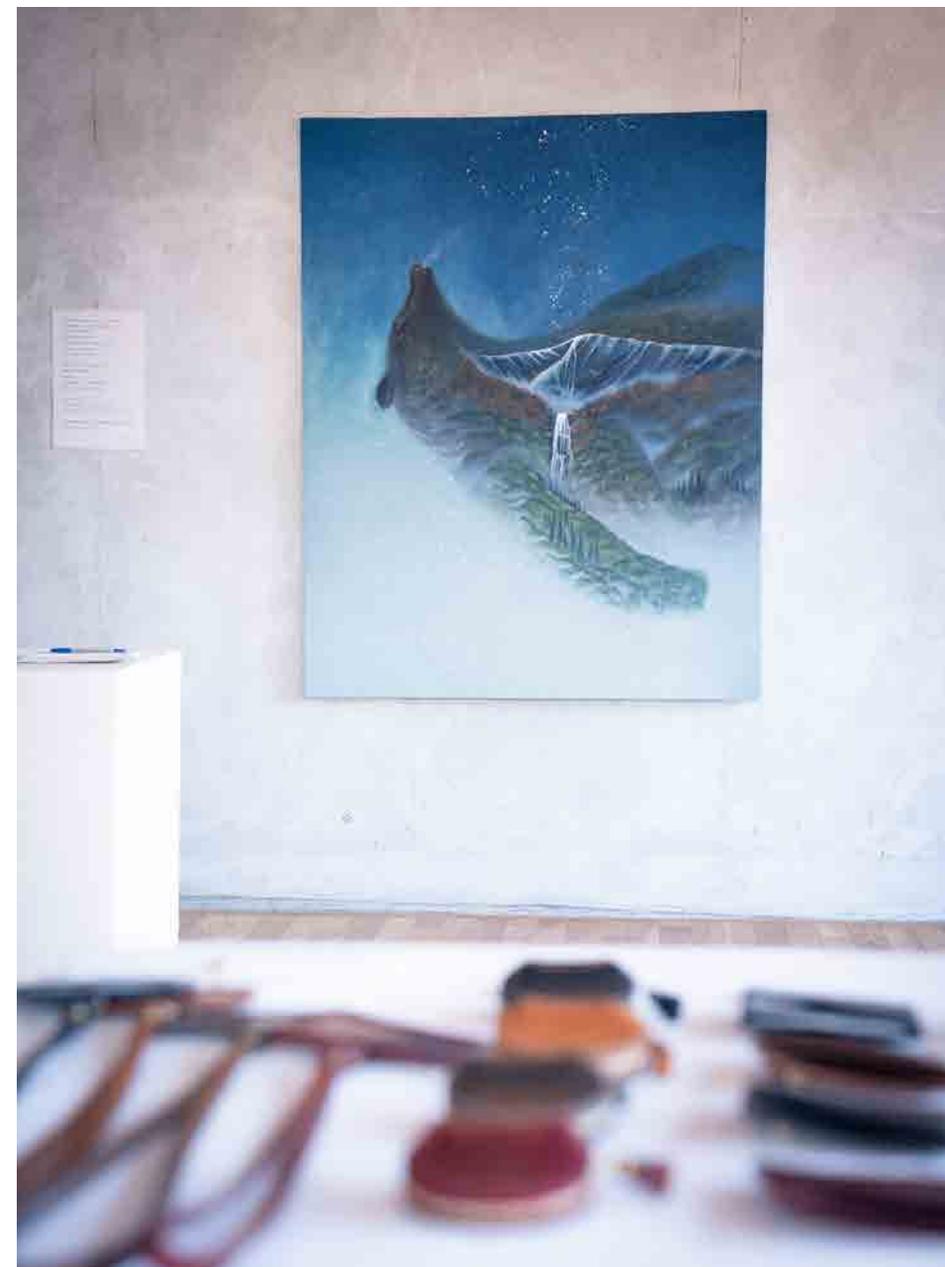
- ㉑ 《シマダカラ 風土絵巻》 2019年 個人蔵
アクリルガッシュ
5000×300 mm
- ㉒ 《一線》 2019年 作家蔵
アクリルガッシュ 岩絵具 胡粉 板
900×450 mm
- ㉓ 《断片化されるもの》 2020年 作家蔵
アクリルガッシュ 岩絵具 水干絵具 胡粉 板
1,620×930 mm

K シェアビレッジ 町村

- ㉔ 《Share Village》 2020年 個人蔵
アクリルガッシュ ワトソン紙
410×230 mm
- ㉕ 《五月雨を乞う》 2021年 個人蔵
岩絵具 水干絵具 胡粉 麻紙
F20号 727×606 mm
- ㉖ 《継承者》 2024年 個人蔵
アクリルガッシュ 岩絵具 水干絵具 胡粉 カンヴァス
M100号 1,620×970 mm

★ 貸し棚 おうみや

- ㉗ 《邂逅の夜》 2020年 個人蔵
アクリルガッシュ 岩絵具 水干絵具 胡粉 麻紙
600×424 mm



デザイン

デザイン | 越後谷洋徳

【チラシ】 A4 サイズ 両面



【タペストリー】 B1 サイズ 片面



【ポスター】 A2 サイズ 片面



【SNS バナー】 1080×1080px、1080×1350px、1080×1920px



作家



永沢碧衣

Aoi Nagasawa

プロフィール

1994年 秋田県出身 絵画作家

2017年 秋田公立美術大学 アーツ & ルーツ 専攻卒業。

主に東北の狩猟・マタギ文化に関わり、自らも狩猟免許を取得。狩猟者としての経験を重ねていくことで出会う種々のものとの関係性を記録・表現した絵画作品を制作している。

巨視と微視を行き来することで「人と生物と自然」の相関を問い、それらの境界線を溶解し消化することが創作の原動。

解体した熊から膠を抽出したり、切り株をキャンバスに見立てたり、石から絵の具を採取したり。

素材としてもモチーフとしても日々、山と向き合いながらフィールドワークを重ね、生命の根元や循環、記憶の痕跡を辿る旅を続けている。

年表

- 2012年 秋田県美術展覧会にて《和海駅の休日》がデザイン部門特賞を受賞
- 2014年 個展「Sky,blue 永沢碧衣作品展」 秋田市アトリオン（秋田）
- 2016年 在学中にアーツ&ルーツの授業合宿にて、初めて五城目町を訪れる
- 2017年 かみこあにプロジェクト 2017 上小阿仁村 旧沖田面小学校 アーティストインレジデンス（秋田）
卒業制作《淵源回帰》が秋田公立美術大学卒業研究作品展 2017 で理事長賞を受賞する
- 2018年 かみこあにプロジェクト 2018 上小阿仁村 旧八木沢分校 アーティストインレジデンス（秋田）
企画展示「淵源回帰」 秋田空港ターミナル1F（秋田）
- 2019年 五城目町にて、合同会社みちひらきが企画する「ミカンセイ教室」の講師を担当
秋田県のツキノワグマ注意喚起ポスター作画を担当
個展「回遊の記憶 migration」 秋田市フォンテ サテライトセンター（秋田）
かみこあにプロジェクト 2019 上小阿仁村 旧沖田面小学校 アーティストインレジデンス（秋田）
グループ展「NO FISH NO LIFE」 ギャラリー樟楠（埼玉）
- 2020年 滞在制作「ゆんたく屋さん in うるまシマダカラ芸術祭」食とアートのクリエイティブユニット「バシヤバ舎」（沖縄）
シェアビレッジ町村のメインビジュアル《Share Village》を制作
- 2021年 グループ展「MORIOKA 神保町ヴンダーカンマー」 岩手県公会堂（岩手）
滞在制作「山をなぞる」秋田市文化創造館 200年をたがやす・生活と表現の広場（秋田）
永沢敏晴 × 永沢碧衣 親子展「生命のとらえかた」 ココロボラトリー（秋田）
Poco Poco Kitchen がオープン。ロゴと店内デザインを担当
- 2022年 個展「霧中の山に抱かれて」 北秋田市阿仁公民館（秋田）
親子展「空っぽのせいぶつ」 横手市雄物川郷土資料館（秋田）
グループ展 秋田美術作家協会 若手会員展「Land Scope」 秋田市にぎわい交流館 AU（秋田）
グループ展「Features」 常陸国出雲大社ギャラリー桜林（茨城）
- 2023年 VOCA展 2023 現代美術の展望—新しい平面の作家たち— 上野の森美術館（東京）
企画展「V」—VOCAのVenus（女神）たち— 第一生命保険株式会社 日比谷本社ロビー（東京）
企画展「Material, or」 21_21 DESIGN SIGHT ギャラリー 1&2（東京）
「シン・ジャパニーズ・ベインティング 革新の日本画 横山大観、杉山寧から現代の作家まで」 ポーラ美術館（神奈川）
映画『ミルクの中のイワナ』サウンドトラック CD のジャケットを担当
秋田公立美術大学開学 10 周年記念展「美大 10 年」 秋田市文化創造館（秋田）
かみこあにプロジェクト 2023 上小阿仁村・五反沢児童館（秋田）
ヘンバイバライ 2023「さとうひより × 永沢碧衣 二人展」 緑日・石蔵ギャラリー（岩手）
企画展「大根ビネーション展」 秋田県立近代美術館（秋田）
- 2024年 弘前エクステンジ #06「白神岬見考」 弘前れんが倉庫美術館（青森）
第9回東山魁夷記念日経日本画大賞 上野の森美術館（東京）
横手市の天の戸・浅舞酒造と永沢の地元山内地域がコラボしたワインラベルのビジュアルを担当（秋田）
越後妻有トリエンナーレ大地の芸術祭 2024 アケヤマー秋山郷立大赤沢小学校ー（新潟）
遠野巡覧木' 24 ガイドブック・オーディオガイドのビジュアルを担当（岩手）
北秋田市くまくま園 10 周年記念絵画《Heart to Face》（秋田）

メディア掲載リスト

- 2024年9月22日 秋田魁新報電子版
<https://www.sakigake.jp/news/article/20240922AK0005/>
- 2024年10月31日 河北新聞オンライン
<https://kahoku.news/articles/20241031khn000002.html>
- 2024年11月7日 毎日新聞『24色のペン 絵描きとマタギ』
<https://mainichi.jp/articles/20241106/k00/00m/040/131000c>
- 2025年3月14日 アーツセンターあきた
 - ・『永沢碧衣 × 山本太郎「永沢碧衣展 彼方の眼に映るもの」アフタートーク vol.1』
<https://www.artscenter-akita.jp/archives/54537>
 - ・『永沢碧衣 × 石倉敏明 × 富川岳「永沢碧衣展 彼方の眼に映るもの」アフタートーク vol.2』
<https://www.artscenter-akita.jp/archives/54389>



まれびとレジデンス vol.3

永沢碧衣展 彼方の眼に映るもの

展覧会

会期	2024年9月20日（金）～11月4日（月）
会場	五城目町各所
主催	合同会社みちひらき
デザイン	越後谷洋徳
助成	芸術文化振興基金
後援	五城目町、五城目町教育委員会、秋田魁新報社、毎日新聞秋田支局、 AAB 秋田朝日放送、公立大学法人秋田公立美術大学

報告書

2025年4月発行

編集 / デザイン	高橋琴美、小熊隆博（合同会社みちひらき）
写真	石丸敬将、永沢碧衣
発行	合同会社みちひらき 〒018-1705 秋田県南秋田郡五城目町上町 39 電話：018-802-0089 メール：info@mono-katari.jp

本書の無断複写・複製・引用等を禁じます。

© michihiraki 2025



謝辞

展覧会開催にあたり、多くの方にご協力をいただきました。
心からお礼申し上げます。

【作家】

永沢碧衣

【展示】

山岸耕輔、矢崎舞子キアラ、福士真穂、益田光、永沢家の皆様

【会場】

福祿寿酒造、下タ町醸し室 HIKOBE、すずなり、山王山 高性寺、佐藤木材容器
環境と文化のむら（自然ふれあいセンター）、BABAME BASE、PocoPoco Kitchen
シェアビレッジ町村、貸し棚おうみや、旧武石自転車